

## 企業

## 日々心豊かに生きられるように

釜石市

石村 眞一 石村工業株式会社

取材日 2013.08.21

石村工業株式会社代表取締役。岩手県釜石市で薪・ペレット兼用ストーブ「クラフトマン」や高速ワカメ攪拌塩蔵機「しおまる」を自社製品に持ち、製造・販売している。東日本大震災の津波で大きな被害を受けたものの、いち早く操業を再開し、現在も順調に事業を継続している。

## 試行錯誤の道のり

創業以来、釜石市内の大手製鉄所の設備補修などを専業としていたが、平成元年に高炉休止となり、事業転換せざるを得なくなった。下請けの仕事を続けながらも、「自社製品を持たなければ生き残れない」と奮起し、自社製品の開発に挑戦し続けた。自分達で調査、開発、製造し、そして売り込むという試行錯誤の道のりであった。現在、薪・ペレット兼用ストーブ「クラフトマン」とワカメ塩蔵機「しおまる」が事業の2本柱になっている。2001年、岩手県工業技術センターの勧めがきっかけとなり、木質燃料の鉄製ストーブを開発、販売する事業に乗り出した。最初は同センターに岩手県軽米町の建具店経営者の「薪ストーブ」技術を紹介された経緯もあり、薪ストーブを生産した。「薪ストーブ」技術は薪の燃焼効率を最大限まで高める技術で、建具店経営者が余った木くずを有効活用するため、10年かけて完成させた仕組みである。日本でペレット燃料が流通し始めた頃から、ペレット用ストーブへ「薪ストーブ」技術の応用を考えた。2003年に試作機が完成し、2004年から本格販売を開始した。デザインも良く、環境にも良いと県内外の環境団体などに好評となり、さまざまな展示会に呼ばれるようになった。2013年度も日本全国へ積極的に赴いている。また2003年、中国産ワカメの増加により国産ワカメ業界が危機に瀕した状況を受けて、取引先のお客様から相談を受けた。これがきっかけとなり、ワカメ塩蔵機（ワカメの塩漬け加工装置）の商品開発に着手した。岩手県水産技術センター、岩手大学工学部との共同開発である。これまで1～2日を要していた塩漬け作業が約1時間に短縮され、コストの大幅な削減と省力化、高品質化ができることと漁師さん達からとても好評な製品となった。

## 3月11日 14時46分

事務所にいる時に地震が来た。とてもすごい揺れ



で、ロッカーやキャビネットが倒れそうになったので必死に抑えた。釜石市出身のため、子どもの頃から地震が来たら避難する事は習慣として染みついていて、尋常ではない揺れだったので、津波が来ると直感的に思った。すぐに従業員を帰宅させて、自分も会社の近くにある自宅へ帰った。家族が避難した事を確認し、高台の小学校へ避難した。最初はラジオで「予想される津波の高さは3mです」と報道されていたので、防潮堤も超えないだろうと思っていた。しかし、湾口防波堤で少しは弱まったのだろうが、あっという間に公共埠頭や橋が波にのまれた。そして予想を上回る大きな津波は、海の近くにある2階建ての我が家の屋根が隠れるほど押し寄せ、家を飲み込んでしまった。信じられないと思ったが、「はあ…こんな事もあるんだな…」と流される様子を見ているしかなかった。その日の晩は小学校の避難所で「もう世の中の終わりかな、会社ももうやめようか」と自問した。

## 従業員達の姿を見て、会社の再建を決意

翌朝会社に来ると、3つある工場の1つは全壊で、2つは鉄骨だけになっていた。機械はすべて海水をかぶってひどい状況だ。停電しているし、ガソリンもない。周囲の道路は瓦礫で溢れていた。と

ころがそうした中、従業員が徒歩や自転車で会社に来て片づけを始めた。私は指示を出していない。従業員達には「会社はもう駄目だ」という考えは一切ないようだった。自主的に片づけをする従業員は、日を追うごとに1人、2人と増えていった。そうした従業員達の姿を見て、会社の再建を決意した。

まずは資金が必要だ。半年、会社を維持できるお金を用意しようと銀行に掛け合った。釜石市内の銀行は一般市民の対応に迫られ企業への対応はできなかった。盛岡まで行き資金を確保した。ビニール波トタンを使って、自分達の手で工場の壁を張り替え、中古の機械をすぐに手配した。全国から応援を兼ねたストーブの注文が来るようになり、5月末からは少しずつ出荷を始める事ができた。また、6月頃には漁師さん達からワカメ塩蔵機の注文が来るようになった。漁師さん達も被災したが、ワカメは1年で収穫できる。ワカメ養殖を再開するにあたり塩蔵機が必要になったのだ。自社製品を持っている事が幸いした。

## 全国の支援に感謝を伝えた被災ストーブ

工場を片づけていると、瓦礫の中から在庫のストーブがたくさん出てきた。海水をかぶり多少傷がある。さらに錆が出てくる可能性もあるため売り物にはならないが、修繕して塗装すれば使用する分には問題がない。そこで、木質バイオマス燃料の普及に役立てていただければと思い、活用してくださる団体への無償提供を呼びかけた。全国紙が記事に取り上げてくれた事も手伝って、全国各地から応募が来た。被災したストーブは、過疎化した農村の活性化に取り組んでいる団体や森林セラピーをしている団体、老人ホームなどへ行き先が決まった。その後高知県の老人ホームの方が来てくださって、毎日炎を見ている年配の方に笑顔が戻ったと、ストーブの活躍を報告してくれた。もちろん修理の費用はかかったが、全国に薪・ペレット兼用ストーブを通じたネットワークができたので、提供して良かったと思っている。

## 大震災を振り返って

日本での木質燃料暖房機の普及はまだ課題が多い。外国製のストーブも流通が増えているため、全国で薪の供給が足りていないようだ。「薪を購入できないか」と関西からのお問合せもあった。現在、釜石地方森林組合と山から木を切り出し、薪にし、供給するまでのシステムを研究している。また、都市部では煙とストックが問題になるため、薪よりもペレット燃料が良い事が分かってきた。



撮影：2011.3.11 岩手県釜石市 建物を飲み込んだ津波

これから家庭用も農業用も技術的な研究をさらに進め、人々の身近なエネルギーとして広めていきたい。

私も約2週間避難所で生活したが、被災した方々は少なからずオール電化住宅のように1つのエネルギーに頼って暮らすスタイルは危ういと感じたと思う。ヨーロッパでは薪ストーブが暖房として多くの方に使われている。しかし、日本では石油燃料のストーブが主だ。日本には全国に山があり、木質バイオマス燃料は私達にとって、とても身近なエネルギーである。少々手間はかかるけれど、薪を作って炎を見ながら煮炊きをして暖を取り、身近なエネルギーと暮らす方が人間らしいのではないだろうか。かつての日本人はそうした人間らしいライフスタイルだったはずだが、いつの間にか変わってしまった。震災後、釜石でもこうしたライフスタイルの重要性が話題となった。震災前は岩手をはじめとして長野や北海道からのストーブの注文が多かったが、震災後は関西地方からの注文が増えている。南海トラフ地震なども危



撮影：2011.3.31 岩手県釜石市 被災したストーブ工場

惧されている事から、電気だけに依存せず停電時でも暖を取れるほか、煮炊きもできる点が好評だ。震災を受けて、薪ストーブのような再生可能エネルギーに対する人々の認識は変わったように感じる。

東日本大震災で釜石でも大勢の方が犠牲になった。日々心豊かに生きられるように、自分にとって何が大事なのか、どう生きていくかが重要だと思う。家族と共に毎日美味しい食事をして、仕事ができ、自然の恵みの元で生きていけるありがたみを改めて感じている。



薪・ペレット兼用ストーブ「クラフトマン」



撮影：2011.3.13 岩手県釜石市 被災した元事務所 (石村 眞一さん提供)



撮影：2011.3.13 岩手県釜石市 被災した本社工場 (石村 眞一さん提供)



撮影：2011.3.18 岩手県釜石市 被災した工場内部 (石村 眞一さん提供)



撮影：2013.8.21 岩手県釜石市 復旧した工場内部 (EPO東北スタッフ撮影)